

となりあわせ

抗えない「匂い」に支配され、暗がりで子宮が歓喜に震える。

【体験版】

硝子蜂 著

蜜々文庫

† 読者の皆様へ

本作は「蜜々文庫」が贈るフィクションの物語です。

作中の過激なシチュエーションはあくまでファンタジーであり、現実のあらゆる犯罪行為（痴漢、暴行等）を容認・推奨するものではありません。

現実の世界では、互いの合意と尊厳を大切に。

——本能の解放は、この物語の中だけでお楽しみください。

前書き

満員電車の密室。混じる吐息と、抗えない「匂い」。

本作は、日々仕事で疲れ切った男女が、理性の境界線を踏み越えていく全8章の物語です。男性視点4章、女性視点4章。合計45,000文字を超える圧倒的な密度で、支配と屈服、そして「変質」の過程を描き出しました。

男性視点では、理性の間で「抗えない欲望」に突き動かされる衝動を。女性視点では、心身ともに「メスへと書き換えられる」甘美な破滅を、それぞれの心の奥から余すことなく描写しています。

終電の喧騒から始まる、密やかで濃密な夜。

溶けゆく「世界の変質」を、どうぞ最後までお楽しみください。

——蜜々文庫

登場人物

†男性 30歳／会社員（企画営業）

安月給と激務に追われる、冴えない平社員。

実は規格外な「イチモツ」の持ち主だが、かつて恋人に拒絶されたことがトラウマで、ずっとコンプレックスを感じてきた。しかし、満員電車で出会ったある女性の「匂い」が、彼の中に眠っていたドSな本能を呼び起こしてしまう。

†女性 26歳／会社員（マーケティング）

ブラックな会社で心身を削り、泥のように眠るだけの毎日。明るく社交的な振る舞いの裏で、「強い男性に激しく求められ、束縛されたい」というM気質な願望を秘めている。通勤電車で見かける「お兄さん」の匂いに、彼女は逃れられない運命と、甘美な救済を予感する。

目次

†彼の夜

第一章：ゆれる、あたる、こまる	-----	7
第二章：首筋の印、お返しの愛撫	-----	29
第三章：背徳の指示と暗闇の絶頂	-----	49
第四章：貫く衝動、溶け合う未来	-----	78

†彼女の夜

第一章：かぐ、よせる、とろける	-----	94
第二章：とろけて、メス・モード	-----	115
第三章：オスに捧げる、絶頂の器	-----	140
第四章：満ちる種、変質する世界	-----	165



彼の夜

第一章：ゆれる、あたる、こまる

満員電車は甘い罠？ 揺れる車内で溶けちゃう理性。

トゥルルルルルルル

「まもなく、電車がまいります。お下がりになってお待ちください」

深夜のホームに、高い男性職員の声が響いた。

ホームの時計は、もうすぐ12時を指そうとしている。

今夜の終電だ。

この路線は高架式なので、ホームは地上から10メートルほどの高さにある。見下ろせば、家々の屋根がぼんやりと広がり、電車を待つ人々の姿も、毎日と同じように並んでいる。

俺の前には10人ほどが列を作っていた。みんな、よれたスーツを着て、肩を落としている。俺も含めて、ここに並ぶほとんどの人間が、同じように疲れ切った顔をしていた。

とりあえず、今日も一日が終わった。

あとは、この鮫詰め満員電車で揺られながら家に帰るだけだ。

25歳で上京して、今年で30歳になる。

特に仕事ができるわけでもなく、いつでも代わりが効く平社員。安月給のせいで郊外の安アパートにしか住めず、こうして毎日、片道一時間の電車通勤を続けている。

「電車がまいります。下がってお待ちください」

アナウンスが再び流れると、大きな音を立てて終電がホームに入ってきた。

車内はすでに人で埋め尽くされ、隙間などほとんど見当たらない。それでも、最終電車だ。乗らないわけにはいかない。

一人暮らしの狭いアパートに帰って、少しでも体を休めないで、明日の仕事に耐えられない。

俺は残った体力を振り絞り、すし詰めの中車内に無理やり体を滑り込ませた。

うぐっ……

周りの人からの圧力で、体が悲鳴を上げていた。

左右の背中が俺を押しつぶそうとしている。とはいえ、向かい合って鼻息を浴びるよりは、断然マシだ。

後ろにいるのは女性だろうか。

なんとなく、背中全体から女性的な柔らかさを感じる。肩甲骨のあたりで小さく動いているのは、後頭部かな。

そして正面には、同じくらいの身長的女性が、俺と電車のドアに挟まれるような格好で密着していた。

正直、嬉しい状況ではある。でも周りからの人圧が凄ま

じくて、俺は彼女を潰さないように必死で踏ん張っている状態だった。

そして正面だが、同じくらいの身長的女性が、俺と電車のドアに挟まれている状態になっている。

女性と向かい合う形で密着状態だ。

んっ……うぐっ。

電車の揺れと、左右からの圧迫に思わず声が漏れる。

くそっ。

俺の息が届く距離に、女性の手がある。

今のうめき声、聞かれたかもしれない。

はぁ……恥ずかしいな。

俺の耳にも、かすかに女性の吐息がかかっている。

俺の鼻息は聞かれないのに、彼女の息はもっと近くで感じていたい。

耳元で聞く女性の息なんて、なんだか危ないものに目覚めそうだ。

くすぐったい……というか、最高だ！

ハハ、疲れているせいか、俺のテンションがおかしくなっている。

俺は気を取り直して、彼女の耳に息がかからないよう、なるべくゆっくり呼吸を整えた。

……スウ、……ハア……、スウ……、ハア……

絶対にハアハアと荒い息にならないようにしなければ。

細心の注意を払おうとするのに、淡い香水の甘い香りがふわっと漂ってきて、むしろ呼吸が速くなりそうになる。しかも、俺の胸には彼女のおっぱいが、ポヨンポヨンと柔らかく押しつけられている。

ああ……柔らかい……

動悸が少しずつ速くなっていく。

体中で彼女を感じている。

はああ……素晴らしい……

顔は見えていないけれど、きっと可愛いに違いない。

ああ……このままハアハアしそうだ……

時折電車が大きく揺れるたび、俺は両肘から手先までをドアに押しつけて、プランクのような姿勢で耐えていた。周りのオヤジたちの圧力と揺れに、ずっと力を入れ続けている。

正直、いつまでこの状態が続くのか、かなり辛い。

ん……？

体力も心配だけど、この状況、かなりまずいのではないか……？

冷や汗が背中を伝うのを感じながら、今さらのように事

の重大さに気づいた。

ヤバいぞ。

これはマズい。本当にヤバい！

いくら頑張っても、体が密着している事実は変わらない。確かに甘い香りも柔らかい感触も堪能しているが……俺は断じて痴漢ではない！

しかし、この状況は、彼女の気持ち一つで痴漢扱いされてしまう可能性がある。

このままでは、人生終了まで一直線だ……！

なんとか体の向きを変えようとあがいたが、鮪詰めの中内ではどうにもならない。むしろ、彼女の体に余計に擦りつけてしまったような気がした。

ああ！……おっぱいがプニョンって……

密着したままの柔らかさをはっきりと感じる。女性も少し身じろぎしたが、満員電車ではほとんど効果がないよ

うだった。

仕事帰りの俺に体力は残っておらず、体勢を変えるのは困難だ。

彼女の表情は見えないが、怒っていないだろうか……

「あの……なんか、すみません」

俺は、彼女に睨まれる前に小声で謝った。

とりあえず謝っておけば大抵のことは乗り切れる。完全なサラリーマン脳だ。

女性の髪の毛が俺の頬をくすぐり、なぜか罪悪感が込み上げてきた。

「あ……いえ、大丈夫です……」

耳元で小さな声が聞こえた。

話しかけられるとは思っていなかったのか、彼女は体を強張らせているようだった。

とりあえず、大丈夫そうだ……よかった。

痴漢冤罪は免れたようで安心した。

何より、彼女の声が可愛かった！

しかも……ああ、彼女の声が甘い……

耳元で囁かれる快感が、なんだか心地いい。

ふふふ……

しばらくはこの余韻と、おっぱいのポヨンッポヨンを堪能できるぞ。

幸か不幸か、この電車は急行で停車駅が少ない。つまり、この状態がまだしばらく続くということだ。

合法的に、この柔らかい感触を満喫できる！

ふふふふふ。

今日も疲れた一日だったけど、これは神様からのご褒美かな。

ガタンゴトン、ガタンゴトン……

電車の窓の外では、家の屋根やバルコニーが次々と流れていく。

電車が時折大きく揺れるたび、俺と彼女の体が擦れ合い、耳元で聞こえる彼女の息遣いが少し変わる。

些細なことなのに、なんだかいつもと違う小さなイベントみたいで、ほんの小さな反応でも十分に楽しい。

全身で感じる柔らかな肢体、彼女の体温……

耳に届く生々しい息づかい……

脳まで溶けそうな甘い香り……

ハア、ハア……

いつも通りのつまらない日常のはずが、今日はもしかし

て特別な日なんじゃないか？

明日から何か新しい日常が始まるんじゃないか……
なんて、ありえない妄想に頭が傾きそうになる。

がんばれ、俺の理性！

今の状況がおかしくても、駅に着けば元通りだ。
俺はただの平凡なサラリーマン。

今日も、明日も、明後日も……左右の暑苦しいオッサン
たちと同じ、交換可能なつまらない存在なんだぞ！

ハア、ハア……

車内の空気がやばいな……頭がぼーっとしてくる。

空調は動いているはずなのに、この満員状態じゃ空気が
こもって仕方ない。酸欠とまではいかないけど、だんだ
ん息苦しくなってきた。

頭がうまく回らなくなってきたのは、きっとそのせいだ

ろう。でも、思考が鈍るのとは逆に、下腹部は少しずつ熱を帯びてきている。

いくら疲れていても……

いや、むしろ疲れているからか……

俺の股間に血液が集まり、硬く勃起始めてしまったのが自分でもわかった。

ハア、ハア……

これはホントにヤバイ……

あそこが勃起したら、もう言い訳のしようがねえ……

亀頭がムクムクと大きくなっていく。

俺のペニスは14、15cmくらいで平均的だと思うけど、亀頭がデカイ。こぶしくらいあると言ったら大げさだけど、昔付き合ってた彼女に「ちょっと……」と引かれたことがあるくらいだ。

しかも今、俺の股間は彼女の下腹部にぴったり密着している。腰を引こうとしても、後ろからの圧力でびくともしない。

このままじゃ、絶対に気づかれる……！

俺はなんとか頭を働かせようとするが、ダメだ。何も浮かばない……

「あの、その……なんというか……すみません……」

とりあえず謝るしかない。

ぼーっとする頭をなんとか回転させて、彼女に謝罪した。

「悪気はないんです……その、痴漢じゃないんです……すみません、あの……柔らかくて……」

ん？

俺は今、なんて言った！？

あああああ！！

何が「柔らかくて」だよ！

ヤバイ、俺ヤバイ、完全に変態じゃん！

このまま警察に連行される……！

自分の言葉に、どっと冷や汗が吹き出した。

俺はどうかしてる……！

俺があたふたと焦っていると、彼女が小さな声で囁いた。耳元に彼女の息がかかり、焦りとは裏腹にゾクッとした甘い刺激が体を駆け巡る。

「あ、いえ……気にしないで、ください」

「むしろ私を、守ってくれてるみたいで……その……すみません。男性は……その、仕方がない、ですよ……」

耳元で囁かれる言葉……

唇が合わさるのか、ピチャッという湿った小さな音……

彼女からの許しを得た安堵と同時に、しっとりした囁きに自分が興奮していることを自覚した。

下着の中で亀頭がさらに大きくなり、皮がめくられて全体が顔を出す。その存在感がどんどん増していく。

ハア、ハア……

ああ、ダメだ、頭が痺れてくる……

ゾクゾクしてきた……

この女性も、俺の声で興奮したり、気持ちよくなったりしてるのかな……？

ハア、ハア、ハア……

女性の耳は、こんなに卑猥だったのだろうか。

ただの耳が、いやらしい体の一部に見えてくる。

俺がこの耳をしゃぶったら、彼女は感じてくれるのだろうか……？

ハア、ハア、ハア、ハア……

この耳の穴に舌を差し込んで、クチュクチュと犯したら……彼女の息は喘ぎ声に変わるのだろうか？

ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……

ごくんと唾を飲み込む。

動悸が、激しいな……

俺のペニスは完全に勃起して、彼女の下腹部をググッと圧迫している。

柔らかい下腹部と俺の腹に挟まれた亀頭から、甘い刺激がじわじわ伝わってくる。

ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……

ああ、股間が熱い……

電車の揺れに合わせて、ムズムズと亀頭が刺激される。その痺れがペニス全体に広がり、内側から時折ビクンッと跳ねる。

ハアハア、ハアハア、ハアハア……

ダメだ……この女でシゴきたい……！

心臓の鼓動はさらに速くなり、保っていた理性もそろそろ限界だった。

大丈夫、大丈夫……

多少のことなら、電車の揺れのせいにはできるはずだ。

少しだけ……少しだけだ……

俺は卑猥な妄想に取り憑かれ、ほんの少しだけ腰に力を入れて、彼女にペニスを押し付けた。

股間に感じた刺激は些細なものだったのに、俺は激しい快感に襲われた。脳内で快樂ホルモンが溢れ出しているのだろう。

うわあああ！

満員電車で、目の前の女性に股間を押し付けている。

その状況に、俺は酷く興奮していた。

はあああ！！

すげえ……すげえ、脳が痺れる……！

ハアハア、ハアハア……

もっとだ……大丈夫だ、もっとだ……

パンツの中がクチュッとベタついている。どうやら、早くも我慢汁が滲み出しているらしい。

ハアハア……

こんなに興奮したのは、いつ以来だ……？

俺は首をやや傾げ、鼻先を女性の首元に近づけて匂いを嗅いだ。彼女の髪の毛が鼻先に触れ、改めて0距離であることを実感する。

もう一度、腰に力を入れて、そっと彼女に股間を押し付けた。彼女がビクッと反応したようだったが、俺はもう正常な判断ができなくなっていた……

ハアハア、ハアハア……

ヤバイ、俺、痴漢してる……！

俺、こんな……

ハアハア、ハアハア……

もしかして、この女性、喜んでるんじゃない……？

いや、そんなわけがない……

ダメだ、やめなければ……

なんか、頭が回らない……

女性が身じろぎし、股間が刺激される。

ペニスがビクンッと震え、先端からビュッと我慢汁が吹き出した。

うあああ……

ハアハア……ハアハア……

これだけでイキそうになる……

ああ、いい匂いだ……ハアハア。

勝手に腰が動く……我慢できない……

すう、ハア……すう、ハアハア……

鼻から彼女の匂いを嗅ぎながら、股間をゆっくりと、繰り返し擦りつける。そのたびに、今まで経験したことのない快感が襲ってきて、ペニスからグジュ、ビュッと我慢汁が吐き出された。

電車の中なのに、俺の理性がどんどん溶けていく。

そんな中、不意に大きなカーブに差し掛かった。激しく揺れる車内。あちこちから、短い悲鳴やうめき声が上がった。

俺は、よろけた拍子に、隣のサラリーマンの背中に弾き飛ばされた。その衝撃でぼんやりしていた頭が少し冷える。慌てて両手、両足に力を込め、必死に踏ん張った。

「きゃっ！」

バランスを保ち、なんとか耐え切ったと思った瞬間、さ

らにグイッと体が引っ張られた。なんと、目の前の女性がバランスを崩し、俺に抱きついてきたのだ！

うっ……！

彼女と一緒に倒れてしまわないように、全身に力を込めてさらに耐える。

彼女としては、倒れないための咄嗟の行動だったのだろうが、俺は、この状況を全力で利用することにした。柔らかい体を存分に感じられる……

ハアハア……ハアハア……

こっちから押し付けていた股間に、女性からの刺激が加わって、亀頭に甘い電流が走る。

ガタンゴトン、ガタンゴトン……

なぜか、彼女から離れる気配がまったくない。

ハアハア……

どういうことだ？

いいのか？ もっとしていいのか……？

俺はやや混乱しながらも、脳みそは完全に性欲に支配された状態だった。自分の欲望を抑えきれず、行動をエスカレートさせていった。

第二章：首筋の印、お返しの愛撫

止まらない彼女の愛撫。俺たちの「一線」は熱く弾け飛ぶ……

彼女が嫌がっていないのをいいことに、俺はさらに一歩、踏み出すことにした。

ハア、ハア……

もうどうにでもなれ。いくところまで行ってやる……。我慢なんて、とっくに限界だ。

目の前には、さらりと流れる髪から覗く彼女の耳。ただの耳のはずなのに、今の俺にはどうしようもなく卑猥に見えて、心臓がうるさく跳ねた。

俺は誘われるように、その耳へ鼻先をすり寄せた。ふわりと広がる髪の匂いを吸い込みながら、鼻先でゆっくりと髪をかき分けていく。

時折、わざと耳をこすってみると、彼女の体がピクッと小さく跳ねた。あらわになった耳たぶに、俺は吸い寄せ

られるように口を近づける。

ハアハア……ハアハア……

柔らかい……

ハアハア……

美味しそうだ……

そして、とうとうやってしまった。彼女の耳たぶに、俺の唇が触れる。

唇に伝わる柔らかい感触に、ゾクゾクする。

俺が唇でなぞるたび、彼女は逃げるところか、ビクビクッと激しく震えて応えてくれた。

勢いのままに、今度は舌でチロチロと甘く噛み、舐め回し、じっくりと味わう。

その時。俺の耳に「ああ……はあんっ」と、とろけるような喘ぎが届いた。

—体験版はここまでとなります。

二人の倒錯した快樂の底へと沈んでいく運命は、製品版
でお楽しみいただけます。

蜜々文庫

奥付

作品名 となりあわせ 【体験版】

/ 抗えない「匂い」に支配され、暗がりて子宮が歓喜に震える。

著 者 硝子蜂

発 行 蜜々文庫

ビジュアル

生成AIによる生成画像を加工・編集

制作注記

本作のテキストは著者による創作であり、AIによる自動生成をベースにした独自の編集・加筆を行っています。

© 2026 硝子蜂 / 蜜々文庫

